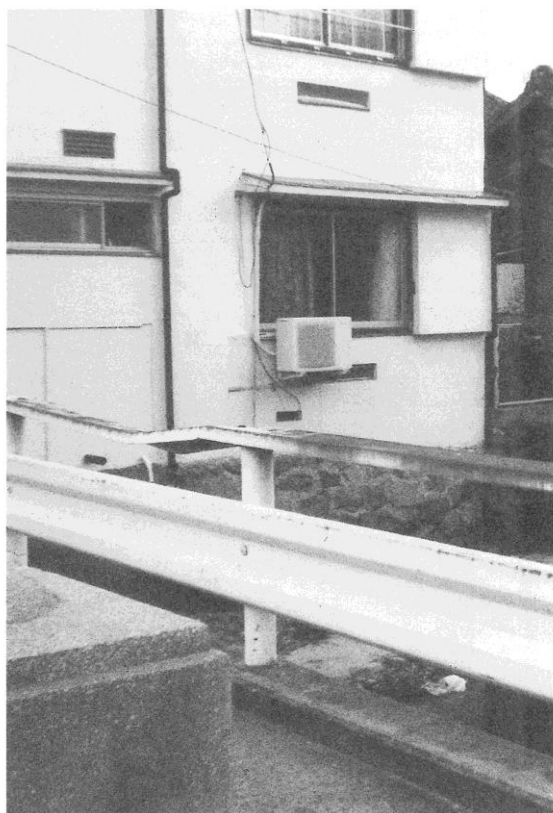


伊豫路の高野長英

播田 邦生



十カ月を過ぎた松田別邸跡（宇和島市）



庄屋邸。隠し部屋へ通じる押入（宇和町）



蘭学者であり、蘭医であった高野長英は、天保十年（一八三九）に逮捕され、天保十五年（一八四四）に牢を破った。母のいる陸奥国水沢へ立ち寄り、東北を潜行して弘化三年（一八四六）に江戸へ戻り、相模足柄上郡に潜伏したのち、翌年麻布敷下に移り棲んだ。幕府明屋敷伊賀者という軽輩ながら数学者として知られた内田弥太郎の保護下にあった。麻布には宇和島藩上屋敷があった。開明派大名と自他共に認める藩主伊達宗城は、長英の論文「夢物語」を、長英が入牢する前に読んだことがあり、家老の松根図書から長英が近くにいることを聞いて、オランダの兵学書を翻訳させようと思いついた。家老の一存で図った形にするため、宗城が国元へ帰っている間江戸で仕事をさせ、翌年宗城が参勤で江戸へ出てくると交代に国元へ連れ帰ることにした。長英は鹿兒島藩の要請を後回しにして承諾した。

長英は嘉永元年（一八四八）二月二十九日に、学僕昌二を連れ、宇和島藩医富沢礼中と二人の足軽に付き添われて江戸を出発した。途中大阪蔵屋敷で江戸へ下る宗城と面談し、四月二日未明に藩船で宇和島湾へ到着した。

当時宇和島城は五角形の堀に囲まれ、堀は湾に通じていた。長英は小舟に乗り換え、まず町会所へ入った。五日後世話役の吉見左膳が現れ、雇用の条件を示した。住処は辰野川沿いにある家老松田佐渡の別荘とすること。給与は四人扶持、翻訳料は適宜申し出ること。三人の藩士に蘭学を教授すること。下男下女を一人ずつあてるが、食費は扶持米で養うこと。城門の出入りは自由であること。

長英は、伊東玄朴の弟子伊東瑞溪と名乗った。弟子の三士は大野昌三郎、土居直三郎、谷依中だった。これに二宮敬作の息子逸二が加わった。塾を五岳堂と名付け、学則を決めた。下女は初め下級武士の娘で行儀作法を身につけた女だったが、一ヶ月ほどで自分から辞めた。後に来たのが髪結床の娘で、とよと言った。二十一歳だった。子供が二、三人いてもおかしくない歳だった。とよはうまくいったようで長英の子を孕んだとも言われる。下男は新吉という忠実な若者だった。

長英は元来酒が強い上に、幕府の追捕への恐怖からか、酒を切らしたことがなかった。また、処遇に不満



血脈は絶えたが家系は残った。向う隣は高野旧宅（水沢市）

に幕府へ密告されるか、さもなくば暗殺されそうな状況だった。やむなく長英は江戸へ戻る決心をし、宇和島から卯之町へ行く途中怪我をした昌二を預けている敬作邸を再訪した。卯之町滞在中隠れ家にしたのが、敬作邸の離れと庄屋清水甚左衛門の隠し部屋であった。

昌二の快復は思いのほか手間取りそうだったので、長英は敬作の紹介で仁右衛門という僕を雇い、六月半ば江戸へ向けて出発した。



二宮敬作の生誕地磯崎浦（保内町）

余談だが、江戸幕末は佐幕・反幕、武士・非武士の別を問わず多くの人材が表舞台に登場した。彼らは士道の体現者即ち、庶民にまで建前として浸透していた士道を本音となしえた人達だった。

第二次世界大戦後日本人は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康ら覇者を理想に権力と富の獲得を自己目的化してきた。結果、いびつな国家・社会が出現した、と言われる。

士道には基底に、個人主義に似た独立不羈の精神がある。体現者は組織・集団内においても自らを厳格な管理の下に置く。新世紀が求める教訓は幕末にあるのかも知れない。

はりた・くにお 愛媛大学文学部卒業後愛媛県へ就職、松山地方局在勤。



生家後藤家跡（水沢市）

で、しばしば鹿兒島へ行けばよかったとぼやいたという。

宇和島には、水戸藩の内紛から逃れ（斎昭承知のうえで）脱藩した二人の藩士がいた。菊池為三郎と梶八次郎であった（名越時正著『水戸学の達成と展開』参照）。長英は彼らに講義をする見返りに水戸や江戸の情報提供を仕入れたのであろう。

嘉永元年末、長英は金比羅参りをすると言い出した。九島の漁師が毎年繰り出す参詣船に便乗しようというのである（陸行したとする説があるが、危険度の高い街道を通ってまで琴平へ行くとは考えにくい）。参詣船には、二宮敬作に別れを告げたあと、示し合わせていた磯崎浦で乗船したと思われる。

翌年二月、金比羅参りのあと宮島丸亀間の参詣船で広島へ渡るつもりだったのを、一旦磯崎浦まで帰って、そこから広島へ渡った。そして広島から宇和島へ、鹿兒島行きを告げる手紙を出した。鹿兒島行の計画は、予め内密に宇和島で立てていたのであろう。

ところが、期待をして訪ねた鹿兒島は、お由良騒動の真只中で、島津斎彬に仕えるどころか、お由良派